

7. 限界突破キャンプ班付きリーダーから

子供たちの可能性（1班）

群馬大学2年生 山本 周吾

限界突破キャンプは一言で言えば「キツイ」キャンプでした。子供たちのケアと並行して慣れない登山に挑むことは精神的にも肉体的にも負担の大きい行程です。大人である私でさえこうなのだから、子供たちは言うまでもありません。そこで、私は担当した1班に対して、意図的にあまり指示をしないスタンスを心掛けました。子供の自立心を育むためにあらかじめ決めていたことでもありましたが、最初のアイスブレイクの段階でこの班なら大丈夫だという確信もありました。結果的に試みは成功し、最後の2日間にもなると私が言わなくても子供達で判断して行動することが出来ていました。1週間という短い期間で成長した子供たち。そしてそれを間近で見、支えることができたことで、自分にできることは何かを考えて、積極的に行動できるようになりました。

子どもたちから学ぶ（2班）

ぐんま国際アカデミー高等部11年生 織田 雛妃

限界突破キャンプのような長期ボランティアは初めての経験であり、私にとってもこのキャンプは大きな挑戦でした。キャンプを通して最も苦労したのは子供達に対する注意の仕方でした。キャンプ4日目、中間の振り返りを書いている時、書き終わった男の子が遅れをとっていた女の子を急かし、女の子が泣いてしまうトラブルがありました。男の子達を集め、話をしましたが、どうして自分が呼ばれているのか分かっていない様子の子も居て、子供達自身に考えさせる事の重要性を学びました。それからは、彼ら自身に自分の行動を振り返ってもらい、間違いに気づいてもらえるような注意の仕方を心がけました。彼ら以上に、ボランティアとして参加した私が子供達から多くのことを学び、大変貴重な経験になりました。

限界突破キャンプを終えて（3班）

東洋大学4年生 寺門 史恵奈

私はこの限界突破キャンプで、人を見ることの大切さを学びました。班付きリーダーとして、子供たちと過ごす7日間は、それぞれが持つ個性を知ることのできた期間であり、途中から悪いことが目立って見えることもありました。私は、その中でなかなか言うことを聞かない子をどうしたらいいか悩んでしまいました。ある時に、けがで歩けなくなった子が車に乗り、それを「ずるい」とほかの子がつぶやいている状況で雰囲気が悪くなってしまった時、「戻ってくるといいな、会いたいな」とつぶやいたのが、いつもは言うことを聞かないその子でした。私は目につく悪いことを見てしまい、その子の持つ思いやりや優しさに気付けなかったことに気付かされました。この経験があり、私はこれから人と関わっていく上で、その人の本質や良さに目を向け良好な人間関係を築いていきたいと思えます。